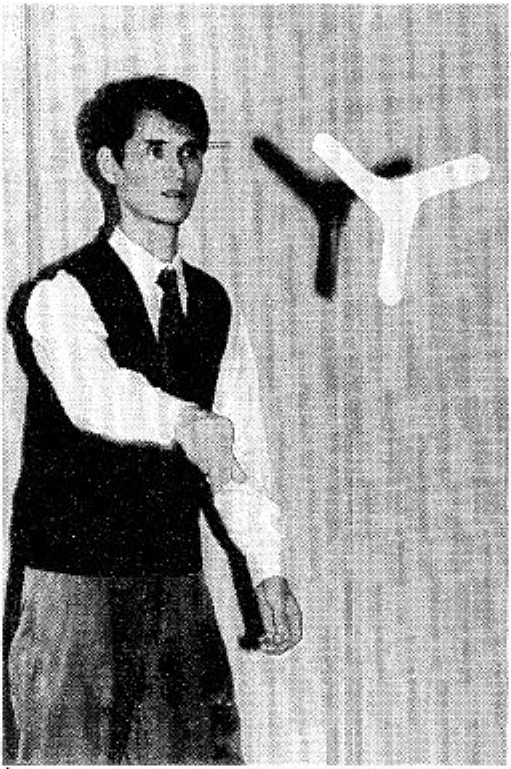
余暇学入門

ブーメラン



▲「まずは紙ブーメランで、その面白さを知ってもらえれば」という西山さん＝大阪市東淀川区の大阪経済大学で

羽根の数や角度に工夫
スナップ利かせ投げる

ブーメランといえば、オーストラリアの先住民が狩猟や戦いの武器として使っていた道具、として知られている。

マンガなどでは、ブーメランが空を飛ぶ鳥を落として、クルクル回りながら戻ってくる光景が描かれるが、ブーメラン愛好家の大阪経済大学助教授、西山豊さん(四四)によると「あれはウソ」。

実際は、草原などに潜む鳥群の背後に網を張り、前方からブーメランを投げて脅し、飛び立つところを一網打尽にしていたらしい。

そのブーメランが日本でも五、六年前からひそかなブームになっている。手作りブーメランで、戻ってくる速さ、正確さ、滞空時間などを競うのだ。

大学でコンピューターによる情報処理を担当する一方で、ゼミの学生たちと「ブーメラン研究会」を作っている西山さんは、我がことのように喜ぶ。

「私自身は子供のころ、おもちゃのプラスチックのブーメランに出合ったのがきっかけ。十数年前から合板を材料に木製ブーメランを作ってるんですが、羽根の枚数、角度で飛び具合が違うなど、もう面白さのとりこになってます。学生たちにはブーメランはなぜ戻るか、を数理的に考えさせることで勉強にもなりますし」

西山さんは今年八月、神奈川県平塚市で開かれたブーメランの第二回ジャパンオープンに初参加した。ゼミ生の四年、梅井崎弘君(二二)は約五十人中六位に食い込んだが、西山さんの方は二十三位。「ウーン、最後は体力勝負になりますから」と当人は苦笑する。

木製の競技用ブーメランは直径五十メートルもの円を描き、初速度が時速約百キロにも達するため、投げる際には広い場所と十分な注意が必要だ。ここでは室内でも楽しめる紙ブーメランの、最も簡単な作り方を西山さんに教えてもらった。

厚手の画用紙(白表紙)で、長さ十数センチ、幅三、四センチの羽根を三枚つくり、それぞれが一二〇度になるようにホチキスで留める。羽根には飛行機の翼のように丸みをつける。肝心なのは飛ばし方。ブーメランは表を内側にして垂直に立て、羽根の端を親指と人さし指でつまんで、スナップを利かせて投げる。

スナップの利かせ方が難しかったが、慣れてくると紙ブーメランは直径数メートルの円を描いて往復に戻ってきて、こちらも病みつきになりそうだった。

「ブームといっても全国のブーメラン人口はやっと二百人を超えた程度。創意と工夫が大切な、これからのスポーツです」と西山さんは話している。(正)

CM天気図

その点、所サンのサンヨービデオは、まだ二作目ということもあるけれど、なかなか面白い。前作は入学式帰りの所サン親子が「もれちゃう、もれちゃう」と道を走ってくるCMだったが、こんどは所サン親子が海辺の露天ぶろに入っている。と、コソドロが所サンたちの脱いだものをさらって行こうとしたらしい。露天ぶろから裸で飛び出した所サン親子が、タオルで前をおさえながら、倍速で追いかけるという設定なのだが、こんども一回目は何を言っているの

の演技になってしまう。が、それが所サンだと、必死に追いかけているふうをしながら、その一方でいまにも自分からふきだしそうなテキトーさで演技をする。つまり、しょせんCMはヤラセだよということを全身で表現しながら、所サンは疾走するのだ。これは、テレビというメディアを知りつくした人だけができる芸当である。

それにしても、と、ぼくはこのCMを見ながら思ったのだが、ビデオというキカイの普及で、ぼくらの時間感覚は、ずいぶん変わっ

いまさら何を、と言われるかも知れないが、自分たちが思っている以上にこれは革命的なことであって、その影響がこれからいろんなカタチで出てくるような気がする。ま、ここではとても言いつくせないけれど、つまらないテレビを見ているときに、「ナマ放送も倍速で見られたらいいネ」なんてつい言ってしまうのも、沈む太陽を自分の扇で呼び戻そうとした平清盛みたいで、ちょっとブキミなものがあると思うよ。

(コラムニスト)

見る

バーンスタイン「オン・ザ・タウン」

偉大な指揮者、「ウエスト・サイド・ストーリー」の作曲家、ピアニスト、教育者と、いろいろな面で活躍したレナード・バーンスタイン。「オン・ザ・タウン」は、バーンスタインが放った初のヒット・ミュージカルで、第二次大戦下、二十四時間の上陸休暇を楽しむ三人の水兵の物語。昔「踊る大紐育(ニューヨーク)」の名で映画化もされたが、今回は作曲者の遺志を継ぐ演奏会形式。

数々のヒットソングにのって、背景に古い記録映画を映したり、名だたる歌手たちが意外に芸達者なところを見せたり、夢中で楽しめるLDだ。(穂)

(グラモフォン・POLG―1126、七八〇〇円。VHS、CDともに二十五日発売)